



ステージに現れた伊藤毅は自分のコーラスマイクの横まで出てくると、真っ直ぐ客席に視線を送った。

そしてそっと左手の拳を胸にあて客席に向かって頷いてからベースに手を伸ばした。

THE CLASHの『LONDON CALLING』のSEをバックにこの行動はかなりベタすぎである。

しかしこの日、伊藤の発していた空気が俗っぽいものではなく、引き締まったものであったから、

見ている側も何となく背筋をただした。

今日の伊藤は格段にいつもと違った。

渾身のダウンピッキングに加え、灰二の歌に迫る勢いの男臭さを全面に打ち出したコーラスをし、オオカミのような雄叫びを何度も入れてくる。

文字にすると暑苦しいが、やみくもな全力さや、過剰なアピールもないので、シンプルな潔さがめっちゃめっちゃかっこよく映った。

何がスゴイって一点匠の仕事で魅せて、聴き手をぎゅっーと引き込んで離さなかった。

「骨のあるベースを弾く人だったんだ！」「かっこいいなあ」思わずため息がでた。

こんなに熱い思いが今、彼の中にみなぎっていたこと自体が意外だった。驚きは、彼が元々硬派なベーシストだった事を呼び起こさせた。

肩と頭でリズムを取り、正面にネックをつき出し左右に体を振りながら弾くベースプレイの一つ一つが、THE STREET BEATS時代の彼の姿と重なった

のは事実だ。

元々熱い思いを内に秘めていたのか？ THE VANILAでプレイすることで熱を帯びていったのか？

その両方が作用した事によるものかもしれない。

渋みを増した骨太な伊藤毅のベースが、そのままバンドの骨格の頑丈さと深みになっていた。

渾身さが途切れることなく注がれて、伊藤のベースを頼りに聴いていると、しっかりTHE VANILAの深部へと繋がっていく。

灰二の歌を「いいなー」と聴いているとその曲にしまりを与えて音のバランスをとっているのが伊藤の太い音だと気づく。「I SAY I AM」はそこにギターが絡み、ドラムの渦に飛び込んで音と一緒にモッシュするような感覚だった。気持ちも体も高揚すると同時に正面からバントと対峙できている満足感にも満たされ、ラストの「ささやかな革命」で言葉にならない高まりを「うお〜」と叫びそうになった。

灰二は抱えていたギターをスタッフに向け宙に放った。次の瞬間、スタンドマイクに飛びつきわしづかみにし歌う。スタンドからマイクを外しハンドマイクで歌う光景は新鮮で何度も腕を振り下ろし客席に指先を向け歌う姿はヴォーカリストとしての魅力が映えるものでワクワクした。

終わってみれば、えらくゴツゴツしたLIVEだったのかもしれない…。

ただ、THE VANILAが前輪駆動から全輪駆動へパワーアップした感覚があった。

「ありがとう」という力強い叫びが響き、ステージに視線を戻すと、深々とお辞儀をしてステージを去る伊藤毅の姿があった。

今日、再始動してからずっとLIVEの軸、活動の軸として演奏されていた小山卓治の『傷だらけの天使』がセットリストになかった。

バンド内の軸がズッシリ固まりつつある

今のTHE VANILAには「傷だらけの天使」の意思を継ぐバンドの方向性を示唆するものがTHE VANILA自身の中に生まれつつあるのではないかな？

そんな手応えを感じた

今日のLIVE(2009.1.16@渋谷La.mama)だった。

「あ〜早く音源が聴きたい！」とアルバムへの思いが更に増幅しちゃったよ。

